



# 浜辺の植物

ハマヒルガオ(ヒルガオ科)、オカヒジキ(アカザ科)、ハマニガナ(キク科)、ノブドウ(ブドウ科)、スカシユリ(ユリ科)、オオマツヨイグサ(アカバナ科)

盛岡森林管理署 森林技術指導官 松尾 亨

浜辺で育った私の夏休みは、海で泳ぎ、砂浜で寝、魚釣りや花火で遊んでばかりでしたが、終りの寂しさとともに宿題の山に追われて「海と山」相互の思い出でした。今では、自然海岸も少なくなり見つけにくくなった浜辺の植物を紹介します。

まずは、砂浜でしっかり根を張っている3種です。ハマヒルガオは、つる性でピンクのラッパ状の花と、丸くて艶のある葉が特徴。朝顔に対して昼に浜で咲くことが由来。オカヒジキは肉厚で針状の葉が特徴で初夏に黄緑色の花をつけます。由来は海藻のひじきに似ていることから。食用出来ます。ハマニガナは、ジシバリに似ており、這うように生育し、飛砂に埋もれても立ち上がりタンポポのような舌状花が特徴。葉が銀杏に似ていることから別名ハマイチョウ。これらは葉にクチクラ質があり塩害や水分の蒸散を防いでいます。

次の3種は少し陸よりで見かけます。ノブドウはカラフルな色の実が特徴のつる性で低木に絡みます。ブドウ科ですが食用出来ません。スカシユリは岩場の隙間など土壌のあるところに根を張りたくましく生きています。花はオレンジ色で上向きに咲き斑点があります。名の由来は、花びらの間が透けていることから。オオマツヨイグサは明治期に渡来した帰化植物で、月見草や宵待草の名で親しまれています。一夜花は、ガなどの昆虫を引き寄せ受粉します。由来は宵を待つ間に咲くことから。

海浜植物との出会いは小学生の頃、理科の授業がきっかけで、多肉で丈夫な葉や、砂に深く張った根の特徴を意外に覚えています。あれから何十年か過ぎ、私が遊んだ浜辺は護岸や人工のビーチになりましたが、残された浜辺はこれからも花が揺れ、少年が走っている浜辺にしたいと思う夏でした！



ハマヒルガオ



オカヒジキと根



ハマニガナ



ノブドウ



スカシユリ



オオマツヨイグサ